

今後のICT環境整備を促進するために

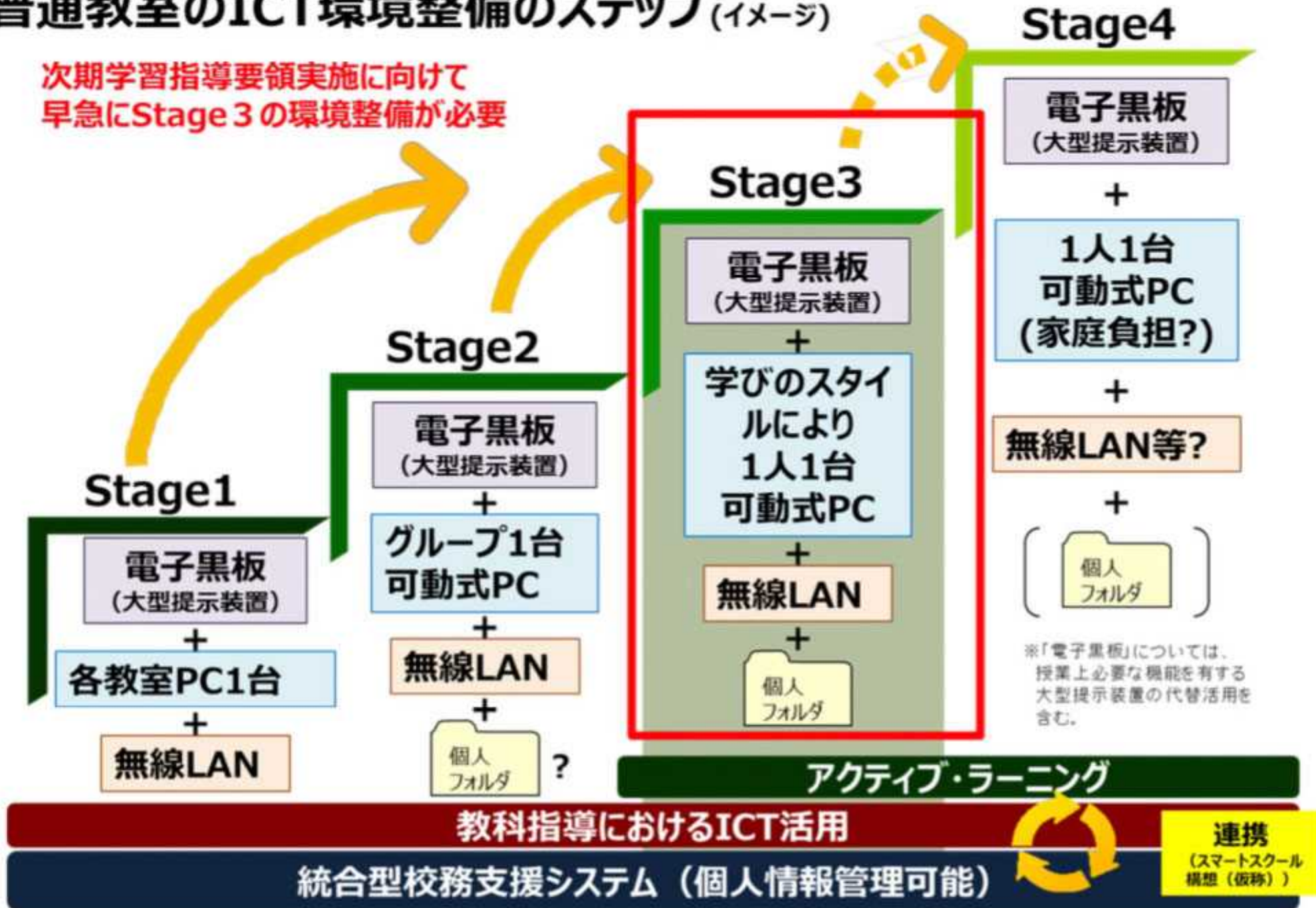
中 川 一 史
(放送大学)

主体的・対話的な深い学びとICT活用

- ・ICT活用における2つのツールとしての役割
 - 主に教員が指導ツールとして活用
(電子黒板などの大型提示装置、実物投影機など)
 - 主に児童生徒が学習ツールとして活用
(タブレット型PC、無線LANなど)
- ・ICTであることの主なメリット
 - 書き込み・拡大提示など強調がしやすいこと
 - 情報共有ができること
 - 保存・送受信など教室空間を超えられること
- ・主体的・対話的な深い学びの実現に向けての検討例
 - 学習課題の吟味が必要であること
 - 「個別」「グループ(ペア)」「一斉」の組み合わせが適切であること
 - 上記のメリットが最大限生かされる環境が必要であること

普通教室のICT環境整備のステップ^o(イメージ)

次期学習指導要領実施に向けて
早急にStage 3の環境整備が必要



現状としての課題1

- ・現状では限られた台数等の環境なので、学校では、たまにしか使わないうちにもっと使わなくなる

(例1) 校内で使う教員が決まっている。

(例2) 校内の階が違くと準備が面倒。

今後の検討事項として考えられること

- ・「普通教室のICT環境整備のステップ」におけるStage3は急務
 - 「共有・移動」から「個別・常設」への流れを見通すことが必要
 - 電子黒板を含む大型提示装置は、全教室に必要
 - 無線LANは、インフラとして必須
- ・学校規模に応じた配備指針が必要
- ・校内配置や運用等の成功例を整理したものが必要
- ・自治体整備との比較ができる個人所有の調査が必要

現状としての課題2

- ・予算獲得のための庁内折衝がうまくいかない

(例1) 予算折衝は、学校の様子や実態をよく知らない、理解してくれない担当者に折衝する。

(例2) 地財措置も、積算根拠となっているだけで、そう使わなければならないという縛りがあるわけではないので、基本的にその積算根拠は無視される。

(例3) ICT環境整備の直接の担当者は1名のみという自治体も多く、相談できず前年度踏襲になりがちである。

今後の検討事項として考えられること

- ・自治体の特徴・現状にあった整備指針が必要
→3パターンくらい必要。
- ・折衝用パンフレットが必要
→パターン別仕様や仕様表記例など。

現状としての課題3

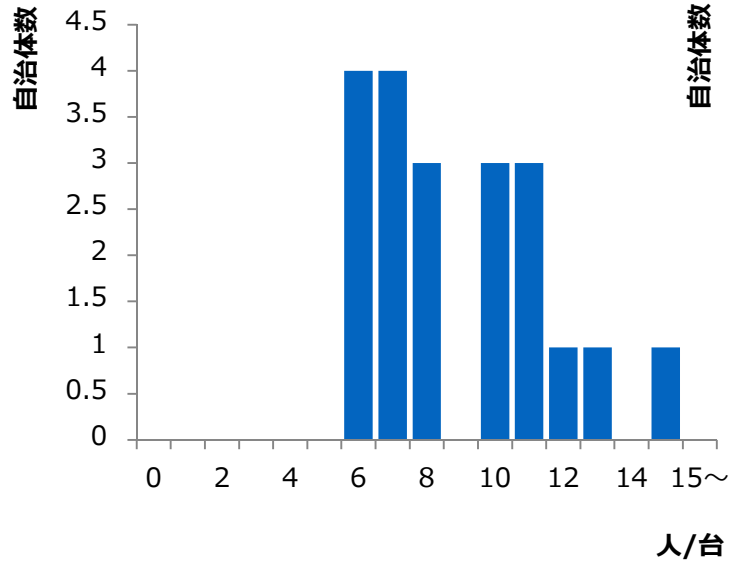
- ・整備状況の自治体格差は縮まらない
(例1)※次ページ参照

今後の検討事項として考えられること

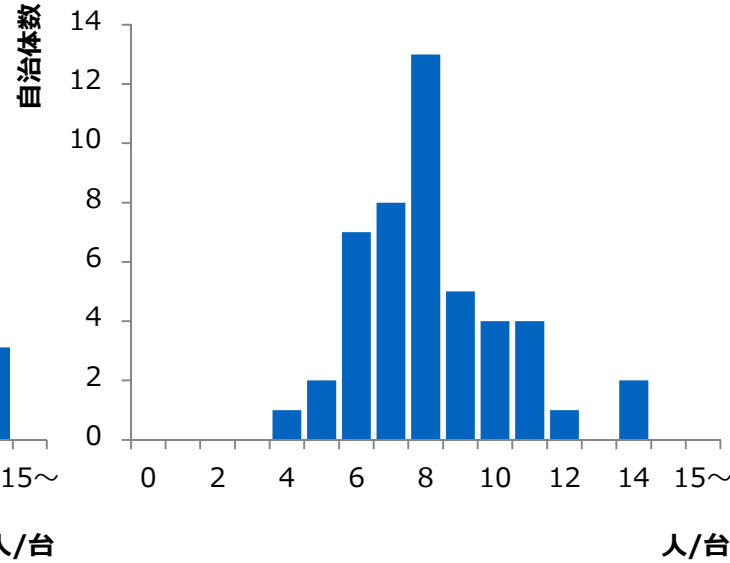
- ・実態調査の順位提示の次の手が必要
- ・最低限整備すべきものを、さらなる強制力を持つての提示が必要
- ・都道府県による情報担当者研修会の開催

教育用コンピュータの整備状況（規模別）

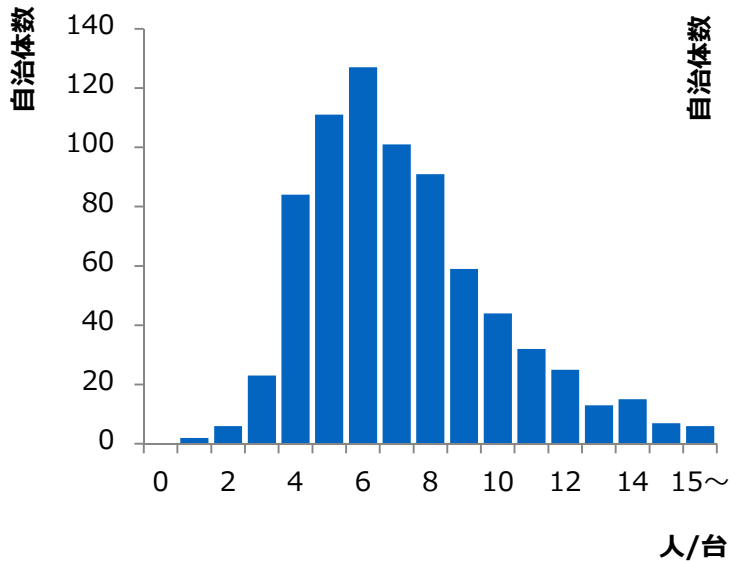
政令指定都市 N=20



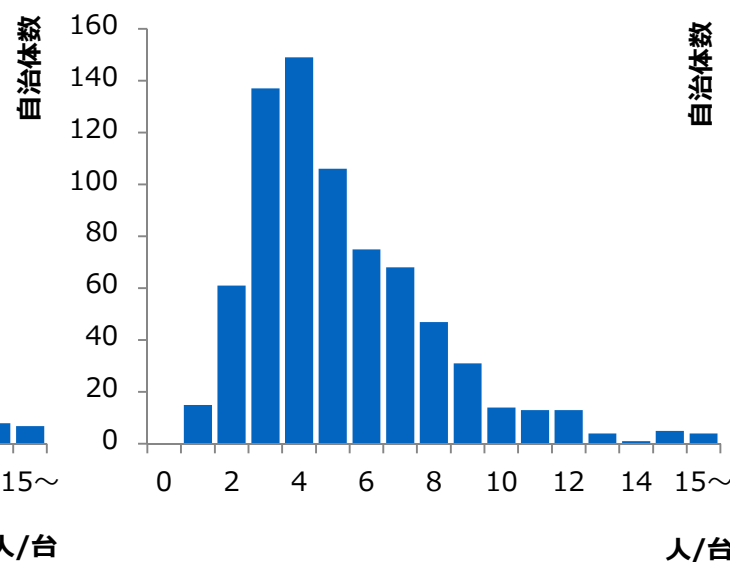
中核市 N=47



市・区 N=746



町 N=743



村 N=182

